

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	寺本羽衣
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授 小熊英二
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授 ティースマイヤ・リン
		政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授 デヴィッド・フリードマン
		創価大学文学部教授	兼慶應義塾大学環境情報学部非常勤講師 ムケーシュ・ウィリアムズ
学力確認担当者：			
寺本羽衣君の学位請求論文は「19－20 世紀のグローバル商業ネットワーク：近代日本の商業空間における英系インド商会の事例から」と題されている。この論文は、横浜と神戸におけるインド人商会の貿易活動の史料分析を通じて、エスニック集団とグローバルネットワークの関係を明らかにしたものである。対象時期は、1859 年の横浜開港から、関東大震災がおきる 1923 年までの約 60 年である。 本稿は序章と終章をのぞき、5 章の本論から構成されている。第 1 章では先行研究をもとに、インドから近代アジア貿易圏へ進出したムスリム商人・パールシー商人・シンディー商人が、19 世紀末に日本に参入するまでに、どのような貿易ネットワークを築いていたかが概説される。第 2 章から第 5 章では、商工録と貿易統計から、横浜におけるインド商人の貿易活動（第 2 章、第 3 章）、同じく神戸における貿易活動（第 4 章、第 5 章）が分析される。終章では、これらの分析を通じて、彼らのネットワークの特性と、世界貿易のなかでの位置が述べられる。 本稿の発見を要約すれば、次のようになる。①当時の世界における横浜と神戸の貿易上の位置が大きく異なっていたこと、②それを反映して異なるエスニック集団のインド商人が横浜と神戸に進出し、異なる物品を異なる商業ネットワークで運んでいたこと、③インド商人が当時の英国商会とは全く異なり、エスニック集団ごとに「アジア間貿易」と「隙間貿易」という独自のネットワークを築いていたこと、④彼らのネットワークは「日本」「インド」「日印貿易」といった国民国家の枠組みでは捉えられない実態を持っていたこと、である。以下では、上記の諸点について要約する。 本稿の第一の発見は、世界システム内における、横浜と神戸の相違である。インド商人のネットワークから見える 19 世紀の横浜と神戸は、大きく異なっている。インド商人たちが二つの港から輸出品として扱ったのは、マッチなどの軽工業品は両港に共通しているものの、横浜は絹織物とオリエンタル趣味物産を中心とし、神戸は綿織物などの近代工業製品を中心としていた。横浜は江戸時代の大名たちの居住地であり、絹や骨董品が入手でき、関東の絹織物産地と商業ネットワークがあった。それに対し、神戸は近代工業都市として発展しつつあり、原綿の輸入と綿織物の輸出が盛んとなった。いわば、横浜が江戸時代の遺産に依拠していた明治初期の日本の貿易構造を象徴していたのに対し、神戸は近代化をとげつつある日本の貿易構造を象徴していた。インド商人たちの貿易活動の分析を通じて、この二つの地域が、彼らの世界貿易のなかで異なる存在として位置付けられていたことが確認できた。 本稿の第二の発見は、「インド商人」と総称される人々が、エスニック集団によって異なるネットワークを世界システム内で築いていたことである。ムスリム商人とパールシー商人は、イギリス資本の中国進出とともにアヘン貿易で富を蓄え、			

香港経由で横浜と神戸に参入した。彼らは横浜からもマッチや雑貨などを輸出したが、主として神戸から綿糸を香港や上海にむけて運ぶようになった。これは日本で発達しつつあった近代的な綿織物産業の物産を、中国や東南アジアの消費者にむけて売するという、綿業を基軸としたアジア間貿易の一部として彼らのネットワークが機能したことを示している。

それに対しシンディー商人は、万国博覧会ブームとともに盛んとなった、オリエンタル趣味物産を世界の富裕層に売るネットワークを持っていた。彼らはボンベイからマレー半島と香港を経由して横浜に渡来し、当初はマッチなどの軽工業品をインドと東南アジアのインド人一般層にむけて運んだが、やがて日本のオリエンタル趣味物産と絹織物を、世界各地の西洋人富裕層やインドのインド人富裕層に運ぶことに比重を移した。これは、アジア間貿易の一部として綿業貿易に傾斜したムスリム商人やパールシー商人とは全く異なるあり方で、高価で利益の大きい輸出品に特化した戦略だった。これにより、彼らは一時は絹織物の日印貿易を寡占し、横浜のインド商人の8割を占めるに至った。

しかしシンディー商人は、この戦略で横浜で成功したがために、他のインド商人が綿業貿易を営んでいた近代工業都市である神戸においてもオリエンタル趣味物産を扱い、綿業貿易にはほとんど進出しなかった。またこの戦略は、日本での近代化と工業化が進めば、必然的に古くなっていかざるを得ないものだった。このため1923年の関東大震災で横浜が打撃を受けると、それを契機に彼らの貿易ネットワークは衰退にむかい、かつての輝きを取り戻すことができなかったのである。

本稿の第三の発見は、こうしたインド商人たちの貿易ネットワークと、イギリス商会との相違である。当時はインドが独立しておらず、インド人商人たちは大英帝国臣民であった。しかし当時のイギリス商会は、日本と英国、さらに英帝国領内の各地を結び、イギリスからの工業製品と日本を含むアジア各地からの一次産品を運んでいた。しかしムスリム商人とパールシー商人は、主として神戸から香港・インド・東南アジアに軽工業品を輸出しながら一次産品を輸入するという「アジア間貿易」の一部として華僑商人などと近い形態をとり、日本の対中国・対インド貿易の基本構造を補完する役割を果たしていた。一方でシンディー商人は、横浜から東洋趣味の珍品と絹織物を世界各地の西洋人とインド人の富裕層に運ぶという、独自の「隙間貿易」を行っていた。これらは、当時のイギリス商会とは、まったく異なるあり方であった。

以上のことから、本稿の第四の発見が導かれる。すなわち、インド商人たちの貿易ネットワークは「日本」「インド」「日印貿易」といった国民国家の枠組みでは捉えられない実態を持っていた。彼らにとって、横浜と神戸は全く異なる存在であった。また彼らは名目的には大英帝国臣民であり、「インド人」であっても、エスニック集団ごとにまったく異なるネットワークを持っていた。彼らは大英帝国やインド、日本などの政府からは独立して動いていたが、その活動が結果として、当時の世界貿易のネットワークを多様化し、拡大していたのである。彼らの貿易活動を、貿易統計の資料分析から検証することで、これまでの研究では捉えられていなかった、グローバルネットワークの実態が明らかになった。

本稿の独自性は、日本に進出したインド商業集団の複層的な商業ネットワークを貿易統計から実証的に検証することで、近代国民国家の枠組みを越えて形成された貿易ネットワークと、近代アジアの地域経済の実態を明らかにしたことにある。エスニック集団とグローバルネットワークの関係は現代でも大きなテーマであると同時に、多様な商人たちがそれぞれの戦略を駆使する模様は現代にも示唆的である。堅実な史料分析を通じて、こうした普遍的問題の解明に貢献したことは高く評価できる。以上のことから、本論文の著者は博士（政策・メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。